



Aブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

手 — 未来 —

母の手は

子どもを抱きしめて ほっとさせるために

父の手は

子どもを持ち上げて わくわくさせるために

医者の手は

患者の痛みを取り除き 安心させるために

教師の手は

生徒を指導し 正しい道を示すために

研究者の手は

真理を求め より良いものを作り出すために

野球選手の手は

観客を魅了し 少年に夢を授けるために

作曲家の手は

人々を楽しませ 癒しを与えるために

彼女の手は

僕にぬくもりと 安らぎを感じさせるために

さあ、

僕の手は ナンノタメニ

不格好

昔から弱虫だったね。ちよつといたずらされるとすぐ泣いて。からかわれても言い返せなくて。結局いつもベソかきながら帰ったつけ。悔しかったんだよ。このままじゃいけないって思ってた。いつも助けてくれたよね。いつも支えてくれたよね。嬉しかったんだよ。このままじゃいけないとは思ってたけどね。

でも一つだけ、嫌なところがあったんだ。不格好な手。せつかく助けてくれてるのに、すぐ格好悪かった。野球やつてるから仕方ないとは思ってたけど、もつと手入れすればいいのにつて。罰当たりだね。こんなこと言える立場じゃないのに。

心に決めたのは十二月。動き始めたのは二月。二ヶ月間何してたのかって？ それは聞かないで。情けないから。

大変だったんだよ。慣れないことするのつて。自分を変えるのつて。結構苦勞して、もういいかなって思つて氣を抜くと、結局何も変わつてなくて。一生懸命がんばったんだよ。おかげで今は見違えるようになった。あれ？ なつてない？ そうだよ。やっぱり助けられてばかりだもんね。

でも、これだけは確かだよ。あの不格好な手。格好悪いなんて思わなくなつたんだ。いつも助けてくれた手。いつも支えてくれた手。今は大切な宝物。毎日、見るのが楽しみ。

ずつと弱かつたよね。でも、もう大丈夫。もう、負けないから。もう、泣かないから。

今は、今なら、あなたが差し伸べてくれた不格好な手を、自信を持って握れる。

最高の冬

北海道生まれの私ですが、寒さが嫌いで、そのため冬が嫌いでした。マフラー、コートなどさまざまな防寒具があります、やつぱり寒いものは寒いです。手袋だつてそうです。多少は寒さをしのげても手先は冷たいことに変わりありません。しかし今は好きになりました。きつかけは去年の冬に彼とデートに行ったときでした。

*

その日は、雪は降つてなく日はさしていたけれど気温が上がりきらない日でした。受験生でなかなか時間が合わず、付き合つてしばらく経つのにデートもほとんど出来ていなかったもので、私は彼との久々デートがうれしくてたまりませんでした。はしやいでいた私は待ち合わせ時刻よりも早くについてしまい、当然彼はまだ来ていませんでした。待ち合わせ場所だった駅のホームは、屋根はあるものの吹きさらしでも寒く、手はかじかみ体の芯まで凍りついてしまいそうでした。予定時刻を少し過ぎたころ

「ごめん」

といいながら彼が走つて現れました。「遅い！」などと思いましたが、寒かったのと久々に逢つたのとで文句を言いたい気持ちをお我慢しました。まだ息も整っていない彼は、手を擦り合わせて寒そうにしている私を見て、照れくさかったのか顔を時刻表に向けたまま

「行こうか」

と手を差し出してきました。それまで一度もそんなことをしてくれなかったことが無かったので一瞬戸惑いましたが、私は下を向きながらその手をそつと握りました。その手はとても暖かく（いや、たぶんそれほど暖かくはなかったのだと思いますが、そのと

きの私にとつては十分で）、手先だけでなく凍りつきかけた心まで溶かされた気分でした。手袋などでは決して出すことの出来ない暖かさでした。たぶんそのときの私の顔は人には決して見せられないほど赤かったことでしょう。さっきの怒りもどこへ行ったのだから、うれしさでいっぱいでした。ぶっきらぼうで不器用だった彼がしてくれたこの行動が何よりもうれしかったのです。私はこのとき初めて冬の寒さというものに感謝しました。こんなにも自然な感じで手をつなぐことが出来たのですから。そのとき「この手を簡単に離すものか」と思ったことは覚えていますが、その瞬間の印象が強すぎたのか結局デートでどこに行つたのか、何をしたのかはよく覚えていません。

*

しかしそんな彼はもうここにはいません。春になり上京するときに、冬の寒さとともに覚えてきました。地元に戻ればまた彼に逢えるかも知れませんが、そのとき私はどんな顔をして逢えばよいのでしょうか。彼がもう一度手を握つてくれるでしょうか。出来ることならば、今年の冬もう一度、彼の暖かい手に引かれながらどこかへ行きたいです。いえ、あの日に戻りたいとさえ思います。

でも、もう吹っ切らなくっちゃ。まだ春も始まったばかりです。冬が訪れるまではまだまだ時間があります。せっかく好きになった冬、嫌いになんかなりたくありません。でも寒いのはやつぱり嫌いです。新たな環境に來たのだから、また一から探しますか。

私の手を取り、最高の冬にしてくれる運命の人を。

俺の手が悪いのか

今日もいつもの満員電車で通勤。

今日の昼は何食おうかな

明日の飲み会行きたくねえな

下向いてそんなことを考えていたから
すぐ前に来た女の表情に気付かなかった。

ぱつと顔を上げたら

え、なんか俺女の人に睨まれてる？
すっげえ嫌そうな顔してんだけど！
何で何で？

あ！

俺の鞆を持つ手が彼女に当たっていた。

俺、痴漢と間違えられてる！

どうしようしょ、俺そんな気無いよ、
とりあえず手を安全な所に動かそう！

逆効果だった。

車内が込みすぎで安全な所が無かった上に、
手の動きが更なる疑惑を彼女に与えたらしい。

うわ、前より怖い顔になった！

だから俺痴漢じゃないって！

あなたも好みじゃないし

ってそういう問題じゃないけど、

そんなに自意識過剰なら

女性専用車両に乗ってよ

心の叫びは届かず、

俺は彼女に電車から引きずり降ろされた。

「ち、ちよっと駅員さん！

俺は手をそんな目的では使用しておりません！」

報讐と怨恨く偽古文調でく

闇夜を走る 仄暗き影

その手に光る 懐剣一振り

怨恨抱き ただひた走る

影が目指すは 「英雄」のもと

戦乱続き 荒れ果てた世に

「英雄」現れ 戦乱収む

されど未だ 世は治まらず

安寧へは ただ時を待つ

暗き影は 闇を駆ける

一人として 気づく者無く

ついに至る 求めし場に

その目の先には 「英雄」の姿

未だ戦乱 収まらざる時

「英雄」の軍 或る村を襲う

その背景は 誰も知らねど

虐げられた 怨みは残る

家族の助けを求める声

友の助けを求める声

生を掴まんと 伸ばされた手に

応ふことも 能わざりし

月一つ無き ある闇夜の日

影と「英雄」 相見え

「英雄」ついに その手にかかる

影の行方は 誰も知らず

「英雄」斃れ 世はまた乱る

安寧の時は 遠き夢と化し

世は再び 戦乱に還る

生み出されるは さらなる怨恨・・・

優しい手

「おい、にいちやんしつかりしろや」

目を覚ましてみれば、変なおっさんが俺に向かつて手を差し伸べていた。辺りを見回せば、お花畑。どうして俺はこんなところにいるのか全く分からなかった。

会社で上司と揉め事を起こし、右ストレートかましてクビになった。高校を中退した俺をいまさら雇ってくれるところもなく、金に困りついにはギャンブルにまで手を出した。賭けては負け賭けては負けを繰り返して、借金だけが一人勝ち。こんな俺を見かねた妻は二人の子供を連れて出て行った。友達も知らん顔して去っていくが、かわりに毎日のように借金取りがやってくる。街を歩けば、外国人が白い粉を持って声をかけてくる。「コレ買イマセンカ」だって。だから買う金がない一つの。

寂しさを紛らわすかのようにギャンブルにのめりこんだ。パチンコ、競馬、競艇、スロットに麻雀etc・・・どれもこれも俺を救ってはくれなかった。

もうどうしようもなかった。日に日に借金は増えていくし、就職活動は不発つづき。ほとんど空っぽの頭を使って思い浮かんだ事は逃げることだけだった。エンジンをかけ、バイクを思いっきり走らせた。自分でも何しているのか分からないままに・・・

その後のことは一つも覚えていない。ただひたすら走りまわっていたことを除いて。そして今、気づけば俺は知らないおっさんとお

花畑で二人きり。そうか、俺は死んだのか。このおじさんは俺を迎えに来てくれた天使かなるほどね。まあこんなダメ男が一人いなくなったぐらいで悲しむ奴もいないだろう。

差し出された手をつかんで起き上がる。その手はゴツゴツして、しわくちゃだったけど、あつたかく、優しい手だった。

「おい、若いモン、行くあてがないなら、ついてこい」

そう言われた瞬間、今までのことがフツと思ひ出された。これが走馬灯というもののかな。あんま素晴らしい人生じゃなかったな。波乱万丈で言えば波乱しかねえや。

「ぼさつと立ってないで早く来い」
俺は黙ってついていった。

親方に連れられて三ヶ月がたった。あの時のおっさんは実は有名な鍛冶職人であり、俺は見習いとして親方の下で下働きをすることになった。毎日雑用をしながら鍛冶の技術を少しずつ教わっている。俺がミスをしたり、アホなことをしたり、「おっさん」と呼ぶと、大きな声で怒鳴られる。つらいこともあるけど、俺はここで人生やり直して、一生懸命働くことに決めた。あの日、こんなどうしようもなかった俺に手を差し伸べてくれた人がいたから。

彼の戦い

運命なんて、残酷なものだと思っていた。

立ち向かうことなんてできる訳がなかった。俺を苦しめるのは、幼いころに刷り込まれた本能だったから。あいつの命令を聞くか、さもなければつらい仕打ちを受けるしかなかった真つ黒な幼少時代。あのころに、「服従して仕打ちを避ける」ことを絶対とした惨めな本能が芽生えた。どんなに誇りを傷つけられても、保身のためにあいつに尻尾を振るのである。それ以外には生きる道などなかった。

しかし、俺はやつと気づいた。こんなことは言い訳だったのだ。弱い俺が、つらい道を避けるためにひねりだした空論。自分で逃げ道をふさいでそこに引きこもっていた。苦しみに立ち向かうことに怯えながら。

だがもう違う。目が覚めた俺には戦えるはずだ。あいつに奪われた俺の誇りを、俺の自由を取り戻すために。どんなに厳しい戦いになっても、くじけちゃいけない。本当の俺を知らしめるのだ！

「お手！」

あいつのささやきだ。黙殺すれば勝てる。しかし、

俺の体は動いてしまった。前足が差し出される。

「すーいー！お利口じゃん！」

「な？見かけによらず頭いいだろ」

こいつは何を言ってるんだ。まだ小さかった俺を「お手できるまでご飯おあずけ」なんて脅した張本人じゃないか！俺の前足はこんな無意味なことのためにあるんじゃない。こいつらには、狩りのための鋭い爪が見えないのか！俺は思わず声を上げた。

「ねー、なんかほえてるよ」

「あ、ごほうび忘れてたな。ごめんごめん」

違う、これじゃますます負け犬だ。俺の声はこいつらには届かない。俺がほしいのは野生の誇りなのに、ビーフジャーキーじゃないのに。もうすべてを諦めて口をつけようとした、そのとき、

「ねー、この子つてお座りもできるんだよね？」

敵の声にはっとさせられる。そうだ、俺にはもう次の戦いが待っているのだ。えさに甘えている暇はない。やつらが挑んでくる限り、こっちも抵抗し続けてやる。今はまだ打ちのめされようとも、諦めてはならない。いつかは勝利を手にする。と誓ったばかりなのだから。

俺の戦いは、始まったばかりである。

おじいちゃんの手

僕は大のおじいちゃん子だった。物心ついた頃からずっとおじいちゃんにくっついてまわっていた。欲しいおもちゃがあるとおじいちゃんに頼んでも買ってもらった。行きつけのおもちゃ屋さんでは三駅となりであって、買いに行く時はいつも手をつないで買いに行っていた。小さい頃は親よりおじいちゃんと手をつないだ時間の方が長かったかもしれない。おじいちゃんの手は温かくてやわらかく、手をつないでいて心地よかった。

僕が小学校に入り、おじいちゃんと手をつなぐことが無くなった頃からだんだんおじいちゃんの体調が悪くなり始めた。はじめ心臓を悪くして入院をしたが手術をして半年くらいですぐに元気になった。しかしそれから一年くらいたって検査のため病院に入院していた時、今度は脳こうそくで倒れてしまった。おじいちゃんはやべれなくなってしまう、しばらくたって植物状態になった。僕はお見舞いに行った時そんなおじいちゃんを見てとてもショックを受けたが、きつとおじいちゃんはまだ元気になると信じていた。

ある日の朝、両親がおじいちゃんのお見舞いに行くと行ったが僕と姉は行かなかった。意識のないおじいちゃんを見るのが嫌だったからだ。僕と姉で留守番をしていたが、あまりにも早く母親が帰ってきた。母親は泣いていた。しばらくしておじいちゃんが家に運ばれてきた。布団に寝ているおじいちゃんの手はおなかの上で組まれていた。その手に触れてみるとすでに氷のように冷たくなっていた。僕はおじいちゃんと手をつないだ時の温もりを思い出すと涙が止まらなかった。

あのおじいちゃんの死からもう10年近くになる。今でもおじいちゃんと手をつないだ時の感触はおぼえている。とても落ち着く感触だった。そういや最近お墓参りに行っていないなあ。今度の日曜日におじいちゃんに会いに行くか。

言葉はななくとも

「ピ——」

長い笛が吹かれた。試合は始まったばかりだが、高校のサッカー部引退は迫っていた。既にリーグ戦で敗退が決まっていた僕らのチーム。残された時間は80分。

前半、相手のチームの方が優勢だった。相手には幾度となくチャンスがあった。だが何とかしのいだ。そのまま0・0で前半を終えた。

「ピ——」。

再び長い笛が吹かれ後半が始まった。何とかこちらのペースに引き込みたかったが、現実にはそううまくはいかない。前半と同じく、相手の方がチャンスを多く作り、シュートも多かった。しかし、相手のシュートは決まらなかった。いや、決めさせなかった。そして、こちらのチャンスになった。

相手のディフェンスラインに近い位置でボールをカット。そのままサイドを駆け上がる。センタリングがあがった。フォワードが走りこみ、滑り込んだ。届くのか・・・届いてくれ・・・ボールの軌道が変わった。キーパーが飛んだ・・・

「ピッ、ピッ、ピ——」

審判の手があがった。こんな嬉しくて、こんな感動したことは今までになかった。仲間たちと手を叩き合ったり、握り合ったりした。言葉はなかったがそれだけで十分だった。

僕がこの世に生まれてすぐ。

空を動く5本の短い棒とふかふかしたものの。

それを見ても小さなぼくはきつと思つたのだ。

…これはなに?

だから、ぼくはそれを口にくわえてみたんだ。

食べた感触。

同時に、

食べられた感触。

どきつとして離れようと思つたら、

啞えていたものがちゃんと離れてくれた。

僕をわかつてくれているみたいだつて、

不思議に思つたに違いない。

そして、それが

感覚をもつて伝わるもの。

意思をもつてうごくもの。

そういうものだということも、

だんだんにわかつてきた。

それが、僕の体の一部ということも、

いつのまにか僕は知っていた。

今、思う。

僕の思いを汲み取ってくれるそれは、

僕の思いを形にするもの。

その可能性を秘めているもの。

あるいは。

意思のとおりには、思つたとおりに、時に、

うまく伝えられないこともあることくらい、

僕だつてもう知っている。だけど。

だからこそ、

うまく伝えられたら嬉しいってこともある、

そう僕は思うし、それも悪くないと思うんだ。

よく、自分つてどこまでの範囲なのかという、

今はチープにも感じる議論もあつたらしいけど。

僕はまじめに考えてしまう。

それは人とながりをもてたとき、

自分の体、皮膚で包まれた範囲を超えて、

どこまでも拡張していくのだと僕は思う。

それがあなたの心に届いたとき、

お互いに共有することができる。

気持ちも含めて、ね。

だから、

気持ちは伝えることができるものだつて、

いまでも僕は思っているんだ。

だけど、

彼のとなりにふたつあるそれは

何かを叩いたり、壊したりしている。

自分の痛みをこらえて、まで。

あのこのとなりにいるそれは、

なにかをつかむことを恐れている、

ように見える。

思い通りにならないことを知ってしまった、

細く白くきれいな指。それは

僕の守れなかった、あなたの優しさの象徴。

あのさ、

願えば叶うつていうのはうそだと思うけど、

願いは叶えられると僕は思うんだ。

今までもこれからもずっとがんばっている。

あなたの願いを叶えられる僕になるまで。

それが僕の願いだから。そして、

そのときあなたに伝えたいことがある。

沢山たくさん、あるんだ。だから、

…だから。いつかくるその日に、

僕はあなたと手をつなぎたい。

「つなぐこと、つたえられること」

私はリストカッター。

こんな灰色の世界の中で、何を言っても振り向いてくれる人はいないし、何をしてても認めてくれる人はいない。こんな私は、ちゃんと生きていると言えるのだろうか。

だから、私はリストカッターをする。

そうすれば、自分が生きていることを実感できる。こんな灰色の世界でも、少しは鮮やかな赤に彩られる。人はこんな私をおかしいと言うが、私に言わせればそういう人達の方がおかしい。

だから、私はリストカッターをやめない。

新しい環境で迎える新しい一年。

私の世界の中に、色を持った人が現れた。

彼もリストカッター。

こんな灰色の世界の中で、初めて私に振り向いてくれた人で、初めて私を受け入れてくれた人。こんな私に、人と触れ合うことの喜びを教えてくれた人。

「君のリストバンドの下、見せてよ」

真夏のある日、彼は自分の左手首にあるリストバンドを私に見せながら、そう言った。なぜ彼にはわかったんだろう。そんな好奇心が私を変えたのかもしれない。

「今度切るときは、俺にやらせてくれ」

それは彼の愛の告白だった。たぶん、私と彼にしか通じない、純粋な想い。じゃあ、あなたのは私に切らせてね。そう返事したら、彼は笑って私を抱き寄せた。

それからの日々は、彼とのごく普通な恋に明け暮れる毎日だった。二人で居るときは、一緒に映画を見たり、一緒に買い物をしたり、一緒にご飯を食べたり、たまには彼の家に行って、一緒に愛し合った。一人で居るときも、次のデートに着ていく服装を悩んだり、料理の練習をしたり、どうしても淋しいときは、彼にしてみらうのを想像しながら自分を慰めた。本当に、私は彼に夢中だった。

ある日、彼を初めて私の部屋に呼んだ。いつもは彼の家でしてたから、ちよつとドキドキする。それは彼も一緒のようで、どこか落ち着かないようだった。

使い捨てメスを取り出して彼に渡す。

左手を握り合う。

手首に当たる冷たい感触。

次の瞬間、鋭く熱い快感。

彼が緊張していたからか、傷が深い。

遠のく意識の中、彼と過ごした日々を思い出す。

彼になら……って思ってた。

なのに、その言葉を、私はとても自然に口にした。

「死にたくないよお」

ある一族についての考察

南アフリカのジャングルに住む少数部族マックフォーン族。彼らはまず生まれた時に、ジャパナツタカタと呼ばれる者に「見立て」をしてもらう。「見立て」というのはこの部族独特の儀式の名称で、右手、左手にそれぞれちようどスッポリと入るような筒（プリングルスと呼ばれる）をはめることである。最初は小サイズ（スモールカン）だが、成長とともにサイズを大きくしていき、最終的には通常サイズ（ミディアムカン）のもので肘から手まで完全に入りきるようになる者も出てくるようだ。彼は、常にそれをはめたまま日常を送る事となる。

プリングルスには村での階級がすぐわかるように、様々な種類がある。例えばまだ通過儀礼を終えてない子供は、黄色の「うす塩」と呼ばれるものをつける。つぎに大人となった者は主に緑色の「サワークリーム アンド オニオン」を装備する。また長老ともなると「シーソルト&ペッパー」をはめる事まで許され、長老以外の者がこれをはめると一族追放という重罰が課される。

このような事をしていて不便ではないのかと問うと、ある若者がこのように答えた。

「そりゃあ不便極まりないさ。こんなじゃ服だつてまともに着れやしない。というか何故こんな事すんのか意味わかんねえよ。この村ん中では長が煩いからつけてつけど傍から見やマジ唯の変態集団だぜ。街中歩く時はモチはずして俺がここの部族って事隠してっからね。」

なるほど、若い者でも一族の誇りは十分に持ち合わせている様である。今日日本に欠けているのはこの精神であろう。

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	手 - 未来 -	18 pt	2 位	0 sp
		母は、父は、医者、教師は……連想のおもむくままにパッパッといろんな手を大書きにしていって、ラスト自問でさくり。軽い読みごちで、狙い通りの表紙エントリー、かつ緑の筒のサワークリームゲット、おめでとう。 ただ、ちょっと平凡な印象で読み流されてしまう感あり。ひとことだけでも個性的なフレーズがあると、もっと映えたのでは。 イチオシフレーズ：「僕の手はナンノタメニ」		
A02	不格好	0 pt	10 位	0 sp
		弱い自分を少しずつ変えてゆこうとする、ひたむきな気持ちが一人称トークでせつせつと。 ひょっとしたら、この無骨な手は心の中の幻なのかもしれない。でもそれに支えられているんだという、春のような全面的な信頼感が、あたたかく伝わってきます。		
A03	最高の冬	3 pt	8 位	2 sp
		寒さのなかだから、より心に残るぬくもり。ていねいに描写されたラブコメ調の風景に浸れたのですが、後半、さっさと次を探しちゃあたりの展開が急すぎて感興をふくらませきれなかった感。 「冬の寒さとともに生きてきた」あの日の思い出に浸るところで終わっても良かったのでは。 特別賞：作者の顔が見てみたい賞/上京で賞 イチオシフレーズ：「冬の寒さとともに生きてきました。」		
A04	俺の手が悪いのか	3 pt	8 位	5 sp
		あ～あ。ちょっとした不運がコミカルにリズムよく描き出されて楽しめます。 順位はあまり上がらなかったけれど、特別賞を5つも受賞!! それだけ話題になったのは価値あることかなと思います、おめでとう。 特別賞：班内で盛り上がったで賞/それでも僕はやってない賞/あなたの手がきつと悪いで賞/リアリティー賞/大慌て賞 イチオシフレーズ：「俺は手をそんな目的では使用しておりません!」「ち、ちょっと」「あなたも好みじゃないし」		
A05	報讐と怨恨～偽古文調で～	0 pt	10 位	1 sp
		叙事詩ですね。二セの英雄を倒してみたところで、この世は乱れるばかり。格調高く伝わってきますが、敢えて擬古文にした効果が発揮しきれていないような。「家族の助けを求める声」のようなフツの文体が混在しているので、全体としてムリしたような印象になってしまった感。ムリ＝チャレンジングな精神はおおいに推奨なのですけど。 特別賞：よくまとめたで賞		
A06	優しい手	4 pt	6 位	0 sp
		臨死体験って、なぜにお花畑なのでしょう？ は措いといて。これは臨死ではなく、そのままさくっと彼岸に渡ってしまったもようです。彼岸で生き直し、というストーリーは爽やかなのですが、でも、彼岸でもせっせと働かなくてはいけないのが、ちょっと息苦しい。どうせなら鍛冶屋さんじゃなくて、もっと彼岸らしい夢のあるお仕事だと、より感情移入できたのでは。		
A07	彼の戦い	29 pt	1 位	1 sp

		「尻尾」で犬だな、と察知。荒ぶる野性本能がけなげに伝わってきて爆笑でした。特に「俺の体は動いてしまった。前足が差し出される。」がツボ。そう、「お手」じゃないんだ、前足なんだっ、と。 臨場感ゆたかな描写で、「次の戦い」へ向けて負けるなっ、と読者の気持ちを味方に付けての首位、おめでとうございます。 特別賞：犬で賞 イチオシフレーズ：「お手！」×2 「これじゃますます負け犬だ」
A08	おじいちゃんの手	4 pt 6 位 0 sp 実体験ベースでしょうか。つないだ手のぬくもりが永遠に喪われてしまうまで。 たんとと語ること、かえってしみじみと迫ってくるものがあります。たとえば、どんなおもちゃを買ってもらったのか、とか一点だけでも具体的に点描すると、そこがより輝いたのでは。
A09	言葉はなくとも	0 pt 10 位 1 sp サッカーほど1ゴールの喜びが大きいスポーツもそうないですよ。その喜びの大きさをリアルタイムでいねいに伝えていただきました。 サッカーは足、でも喜びの表現は手、という対比をよりクリアに見せると、お題がより生きたように思います。 特別賞：スポコン賞
A10	つなぐこと、つたえられること	8 pt 4 位 0 sp 赤ちゃんの指しゃぶりがとても新鮮な視点で語られて、冒頭いきなり引き込まれます。ちょっとクサくなる後半も「あなさ」がじょうずに救って純愛さわやかなラストへ。おしあわせに。
A11	Seize the Day	13 pt 3 位 2 sp うわ。とちょっと引き気味になりながら描写の迫力にたじろいでいると、かなり深い結論へ。 人の心の痛みにするどく踏み込むテーマだけに、途中で妙なミスリードは、かえって逆効果に思えたのですが、いかがでしょう。読者サービス?? 愛し合うことは、すなわち傷つけ合うこと、その深刻さを減速させずに、そのままストレートにぶつけていただくのもありかな、と思った次第です。 冥王星からリストカッターへ、変幻自在の作者さんの今後に期待。 特別賞：A4賞/まぬけ?賞 イチオシフレーズ：「死にたくないよお」×3 「今度切るときは、俺にやらせてくれ」「私はリストカッター」でイチオシフレーズ大賞も受賞です。
A12	ある一族についての考察	8 pt 4 位 3 sp よく思いつくなあプリングルス。爆笑ネタをもっともらしい口調で、という語り口のはまりっぷりがたまりません。お茶会ネタにおいしくいただきました。 特別賞：独自の視点が良いで賞/コンソメスープがなかったで賞/シーソルト&ペッパー賞 イチオシフレーズ：「ジャパナッツタカタ」×2

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	あの時の握手	12 pt 4 位 0 sp はじまりは、熱くスポーツドラマ。 ハッピーエンドに終わっていないところが、逆に真実味を感じました。走りの光景を少し点描していただくと、より入り込めた気がします。スポーツはいいなあとしみじみ。これが大学合格のほうじゃ、やっぱり絵にならないですよ。 イチオシフレーズ：「お前が選手になれて、本当に良かった」		
B02	愛しい手	0 pt 10 位 0 sp 手の動き、耳のピクン、観察力のゆたかさを感じます。 ただ、すぐに猫だなとわかるので、さいごまで伏せておく必要はなかったのでは。身を以てネタを提供してくれたミックス君によろしく。		

B03	親父	5 pt	6 位	1 sp
		親父の手、赤ちゃんの手、そしてグローブ。三つの具体的なモノをうまくつないで未来志向のストーリーにしたワザが光ります。ぱっぱっとイメージだけを大写しにして、語りすぎない手法も効いてますね。コンパクトに見せるワザ。まるで30秒CMのような(ー絶賛)。 特別賞：あったかいで賞 イチオシフレーズ：「目元が君にそっくりだ」		
B04	レポート提出日の心情	0 pt	10 位	2 sp
		日常光景をコミカルに。「手」の解釈がユニークでした。 ちょっとオチが弱いかな。レポートの内容を少し盛り込むと親近感が湧きそうですが。0ポイントだったけれど、「その手があったかああー！」がメガヒットでイチオシフレーズ大賞ゲットです、おめでとう。 特別賞：ウケねらい賞/その手があったで賞/このテーマに「その手があったかああー！」賞 イチオシフレーズ：「その手があったかああー！」× 9		
B05	丘	25 pt	1 位	0 sp
		重たい擬音とともに重たい光景がまわりはじめます。 沖縄戦。現在形で語ったところが、描写のこまやかさとあいまって映画のような臨場感でした。徹底して「僕」の視点、というブレのなさも読者の心につよい印象を残します。納得の首位といったところでしょうか。おめでとう。 イチオシフレーズ：「次はお前が行け」「土煙になって死んだ」		
B06	手のひらに降る雪	3 pt	7 位	0 sp
		まっしろなふわふわ。仔犬でしょうか。「ゆき」という名前ははまりすぎの気もするけれど、雪の儚さときれいにシンクロして、失われたもののせつなさやしんしんと降り積みます。		
B07	手は語る	6 pt	5 位	3 sp
		発信機であり受信機でもある。そんな手についての思いのたけは伝わってくるのですが論証として組み立てきれなかった感。 ○○だから●●、よって××、と証明のようにまず論旨を整理してから枝葉をつけるとよいのでは。でも、固いものへのチャレンジが評価されて「教科書にのっていてもよい」教科賞などいただけました。 特別賞：教科賞/おつかれさまでした賞/改行しま賞 イチオシフレーズ：「手は語る」		
B08	手相売ります	15 pt	3 位	0 sp
		妙なものの売り込みが、「ございます」調で、まじめくさって語られて、おかしみを醸し出します。最後に一波乱という組み立ても楽しい。年齢まちがいのこいつは通信販売でしょうか？ 特別賞：タモリ賞		
B09	風の便箋	0 pt	10 位	3 sp
		TA陣に衝撃走る。なにゆえに、この作品がゼロポイントなのかっ！ 空を見上げる思いで読みました。うつくしい。風の便箋という風習に載せて奏でられるピュアな思いが、しあわせ色に染まります。ちょっと非日常、ちょっとメルヘン、そのさじ加減が絶妙でした。 特別賞：明日は明日の風が吹くで賞/独特で賞/オリジナリティ賞		
B10	- あの日を境に -	1 pt	9 位	0 sp
		靴に落ちる涙。前へ前へと新しく生き直してゆこうという気持ち。寓話的光景としてくっきり見せて応援したくなる共感力大のメッセージトークでした。 イチオシフレーズ：「番号19をつけた僕の待つ場所を目指して」		
B11	変心	21 pt	2 位	0 sp
		ラストの赤く染まってゆく手がイメージを鮮烈に喚起。医者という仕事のすさまじさがずっしり伝わってきます。想像力で、ここまでリアルに描けるものなんですね。 ちょっと残念だったのは「先生、次の患者さんが……」というタネアカシ・セリフのぎこちなさ。ここがポイントなので、もっと自然体で。 特別賞：あとあとよく考えたらサイコーだった賞		
B12	ice and hands	2 pt	8 位	3 sp
		指にくっつく氷、というとても身近な体験から立ち上げて、叙情ゆたか。 春の太陽、そして霜。人の心が誰しも備えている二面性を対話形式でこだまさせたところが秀逸でした。 特別賞：構成にこったで賞/レイアウト賞/レイアウトが良かったで賞		